

最弱ジョブ  
【弓使い】の俺、うっかり  
迷惑／Sランクパーティーを  
ボコして  
しまう

2

果一  
hatehajime

must. みかみマイケル

# CONTENTS

エピソード	塩江かや	251
第四章	進む者、潰える者	215
第三章	『関係ないだろ』	167
第二章	暗躍する傀儡師	111
第一章	束の間のバカンス	025
プロローグ	これからの選択	007

Weakest Job  
Archer

# 主な登場人物

CHARACTERS

きんづか はやと  
**君塚隼人**

ダンジョン運営  
委員会幹部の息子。  
マリオネット  
【傀儡師】の能力で弱みを  
握った相手を支配する。

いぶき ありさ  
**息吹亜利沙**

翔の妹で、天真爛漫な  
ムードメーカー的存在。

やしろ 英次  
**八代英次**

気さくで裏表がない。  
翔のクラスメイト。  
失言が多いが憎めない男。

たかね のんか  
**高嶺乃花**

翔の幼馴染で、才色兼備の少女。  
男子からの告白を断り続けている  
ことから“体育館裏の女帝”と  
呼ばれているらしい……？

てらしま みずき  
**寺島瑞紀**

ダンジョン運営委員会支部長で、  
豪胆な性格の美女。  
絶賛彼氏募集中。

いぶき かける  
**息吹翔**

本作の主人公。  
ジョブ  
最弱役職と蔑まれる【弓使い】にして、  
最高位ランクに到達した最強の冒険者。  
目立ちたくないタイプだが、  
困っている人は放っておけない。

しお 江  
**塩江かや**

翔の同級生で、  
気の強い孤高の少女。  
容姿が似ていることから  
“正体不明の英雄”その人  
なのではないかと噂され……

プロローグ

# これからの選択



Weakest Job  
Archer

「キミ、ウチと契約を結ぶ気はないか？」

「……はい？」

「ウチの企業と金銭契約を結んで、ウチの会社の『顔』として活動してくれないかという勧誘だよ。要するに、プロ冒険者にならないか？ という提案だ」

ダンジョン運営委員会支部。二十二階建てビル最上階の、広々としたオフィスにて。

足を組み、不敵な表情で八重歯を見せながら、野性味のある豪胆な美女——寺島瑞紀支部長はそう告げた。

なぜ、俺——息吹翔が目の前の美女に睨まれているかというのと、つい先日ダンジョン運営委員会から呼び出しを受けたからに他ならない。

てつきり、俺が通っているアマリリス上等学園内にあるダンジョンに異変が起き、それを独断で鎮圧したことを怒られるかと思っていたのだが……どうやら、違うようだ。

むしろ、その前に起きたこと。木山豪気たち迷惑Sランクパーティーを単独で壊滅させたことに起因しているような気さえする。

——プロのダンジョン冒険者。

それは、ダンジョン運営委員会と契約を結び、委員会からの要請に従って活動する冒険者のことだ。

西暦2000年にダンジョンが現れ、調査の結果、正式にダンジョンを一般開放してからというもの、ダンジョン社会は発展の一途をたどってきた。

それこそ、現世のルールと異なる法則が働く理解不能な危険世界から、宝と冒険にあふれた好奇心をくすぐる楽園へ。ダンジョンに潜ることが当たり前となった今、プロ冒険者は憧れの職業の一つとして、注目を集めている。

俺も詳しいことは知らないが、話を聞く限り運営委員会主催のイベントや求人広告に起用されたり、ランク昇級試験の審査官を担ったりするらしい。

ダンジョン冒険者は通常、モンスターを狩ってドロップしたものや、探索により得たアイテムを、ギルドなどを通して金銭に変換できる。逆に言えば小遣いを得る手段はそれだけだ。

当人の実力やランク、運、パーティーを組んでいるかどうかで取り分は変わり、安定した高収入を、というのは土台無理な話である。

もちろん、宝くじに当たる感じで激レアアイテムをゲットしたり、実力を上げて希少なモンスターを討伐したりして億万長者になった冒険者もそれなりにいるため、今なお名声や一獲千金を夢見てダンジョン攻略に勤しむ者が後を絶たないのだが。

とにかく、プロの冒険者は運営と金銭契約を結ぶ以上、遥かに高く安定した収入を得ることができるといのが、最大のメリットだろう。ダンジョン運営委員会の『顔』として活動することで、知名度が大きく高まるのも魅力の一つと言える。

ダンジョン運営委員会のために働く都合上、「委員会の犬」などと揶揄されることもあるが——大抵の場合は選ばれなかった者の難癖だ。どんな形であれ、プロ冒険者に拔擢されるのは名誉なことなのである。

「もちろん、この契約をすることでキミに大いなるメリットが発生することは、この私が保証しよう」

てつきり怒られるのではと思身構えていたがゆえに、拍子抜けしてしまった俺を差し置き、寺島支部長は言葉を続ける。

「ダンジョン運営委員会という大きな後ろ盾ができれば、活動の幅は大きく広がる。それに、今までの活動よりも多くの金銭が手元に入ることになる。新しい出会いもあるだろうな」

「新しい出会い、ですか」

「ああ。具体的には、今をときめく美少女ダンチューバーとか……な？」

寺島支部長は、意地悪くニヤリと笑いながらそう告げた。

「美少女かどうかは置いといて。ダンチューバーって言うのと、あれですか？　ダンジョン攻略の様子を動画投稿サイト「ダンチューブ」にあげてる冒険者の……」

「ああ、そうだ。最近の若手人気層だと……そうだな。「南あさり」とかか？　学園でも話題になつてるだろう？」

「？」

南あさり？　誰だそれは。南の海で潮干狩りでもやってそんな芸名だな。

と、怪訝そうに眉をひそめる俺を見た支部長は、やれやれと肩をすくめてみせる。

「はあ、その様子じゃ全く知らんようだな。最近のトレンドくらい知っておかんと、学園での話題に困るぞ？」

「いや、今のところ特には困ってないんですけど……」

「そうやって斜に構えてると、話題に乗り遅れて後悔するぞ？　話題に乗り遅れて人の輪への入り方がわからなくなった結果、婚期にまで乗り遅れた私のような。ふっふっふっふ、あれなぜだ。目から水が」

勝手に助言して勝手にダメメジ喰らってるよ、この人。

豊かな胸元を押さえ、吐血でもしそうな感じで苦しむ寺島支部長を見て、「どうすればいいんだ、これ」と困惑するしかない俺であった。

「——まあとにかく、だ。契約を結ぶことは悪いことではないと思うんだが、どうだろう？」

なんとか立ち直った寺島支部長が、改めてそう勧誘してくる。

「逆に聞かせていただきたいのですが、あなた方が俺に声をかけた理由ってなんですか？」

「ん？　そんなもの決まっているだろう」

何をわかりきったことを、とでも言いたげな顔で、寺島支部長は言った。

「金になる」

——いつそ、清々しいほど着飾ることなく、簡潔に。

「かつ——」

「キミ、ネットが今どうなっているか知ってるかね？」

「ネット？」

「ああ。キミが大立ち回りを演じた、迷惑パーティー退治。おおもとの生配信の再生数は未だ衰えず、つい先日一億再生を突破した」

「いち、お——っ!？」

あまりに想像の斜め上に行く事態に、俺は一瞬頭がブラックアウトしかけた。いや、真っ白になりかけたからホワイトアウトか？

だが、そんな俺を無視して彼女は俺の脳にさらなる情報をぶち込んでいく。

「それだけではないぞ？ ネットニュースもツイッターも、キミの話題で持ちきり。弊社にも連日電話が殺到している。やれあの冒険者は誰だだの、やれ取材をさせろだの。正直、写真集の一冊でも出さなきゃ收拾が付かんレベルだ」

「……ま、マジかよ」

「マジだよ」

絞り出すようにそう呟いた俺に対し、彼女はやれやれと肩をすくめる。

なんか知らぬ間に英雄にされていたあげく、変な方向に話が加速してないか？

「ま、そんな感じで、こちらとしてもキミをみすみす手放すなんて手はない。というわけで、いさぎよくウチの会社の金蔓かねづるになってくれ！」

「いやいやいやいや！ 少しはオブラートに包みましょうよ!？」

「そういえばキミは、今日怒られるつもりで来たんだっとな。よし、キミの懸念けねんについては不問にするから、そのかわりプロの冒険者に——」

「さつき不問にされたことを蒸し返された上で悪条件が追加された!？」

「はっはっは。流石にこれは脅迫きょうはくになるから冗談だ、済まなかつたな」

「全体的に話がぶっ飛んでて、冗談と本気の違いがわからない!」

俺は思わずそう叫んでいた。ミステリアスな人間だと思っていたのに、その実随分と思いつりのいい人だ。デリカシーがないとも言う。

大体——

「あなたさつきからまったく自重してませんけど、俺を勧誘する気ないでしょ!？」

「ああ、そうかもな」

「……え」

半分冗談のつもりで言ったことが肯定され、俺の方が思わず口ごもってしまった。

先ほどまでの人を食ったような表情が一変、寺島支部長は真剣な表情でわずかに身を乗り出す。

「確かに、運営委員会全体としては、なんとしてでもキミを囲い込みたい。これは嘘偽うそいつわらざる本音

だ。企業というものは慈善事業じゃないからな。金になりそうなものはなんでも使うし、そうでないのならば見向きもしない。が——」

寺島支部長は小さく息を吐いたあと、俺の目を真っ直ぐに見据えて口を開いた。

「だが、私個人としては、キミには今のままであつてほしいと、そう思う気持ちも確かにある」

「なんで……」

「キミの映っている動画を見た。Sランクという高い実力を持ちながら、力に驕らず、暴力の前に倒れた知りもしない者を憂い、それを行った者に対して心からの憤怒を露わにする。昨日の一件もそうだ。死の危険があるダンジョンへ、それでも迷いなく誰かを助けるために飛び込める。そういう、『誰かのために本気で怒れる。誰かを助けるためなら、打算抜きで命を張れる人間』というのは、久しく見ていなかった」

「……………」

「キミがきつと、そういう人間だから、ここまで動画が拡散されたんだと思う。ただキミが最弱役職で無双したというだけじゃ、ここまで多くの人の心を打たなかった。だから、お金という打算的な関係でキミのようなヒーローを縛るのは、少し違うと思つたんだ。ま、キミのことを知りもしないのにこういう勝手な印象を抱かれても、はた迷惑な話かもしれんがね」

わずかに愁いを帯びた表情で、寺島支部長は笑う。

支部長の責任は重大だ。それでも——一人の人間として、嘘偽りない心情を吐露してくれた。一

団体の利益を追求しなければならぬ立場にいながら、それでも俺個人の思いを優先させるためにひよっとしたら、何もオブラートに包むことなく、利益のためという理由をまず述べたのも、打算ありきの関係に縛ることへの罪悪感があつたからなのかかもしれない。

「まあ何にせよ、決めるのはキミだ。こちらとしてはあくまで、提案を持ち込む側だからな。受け入れるのも蹴るのも、キミの自由だ」

俺としては、プロ冒険者になりたいかというのと、どちらかと言えばNOだ。

俺の目的はあくまで、ダンジョンの探索を楽しむこと。誰かの期待を背負うとか、他の見本になるとか、そういうのはガラじゃない。望む平穏な生活からは、まず間違いなく遠ざかる。

その一方で、安定した収入が入るとするのは一考の余地があつた。

というのも、家庭事情の問題だ。両親は三年前に他界しており、今は親戚の叔母さんの家に引き取ってもらっているとはいへ、安定した生活を送れているとはお世辞にも言えない。

叔母さんに負担をかけてしまっているし——何より、過酷な子供時代を過ごした亜利沙には、幸せな人生を送ってほしい。

まあ、あの優しい義妹のことだ。「お兄ちゃんがいてくれるなら幸せ」などと、言いそうなものだが——それでは兄としての面目が立たない。

世の中お金幸せのすべてではないが、お金は幸せの選択肢を広げてくれるものだ。亜利沙が笑って育てる環境が作れないのなら、何より自分が許せない。これまでダンジョン冒険者として活

動してきたのも、少しでも得意なことでお金を稼いで亜利沙達のためになることをしたかったという理由もある。

俺は少しの間思案して、しかし答えが出ないことを悟った。

「——少しの間、考えさせてください」

「ああ。大事なことだ。よく考えろといい」

支部長はふっと笑みを浮かべて、「そういえば」と何かを思い出したように呟いた。

「キミがもし即決でプロ冒険者になった時のために、コイツを渡されていたんだが。なってくれたとしても、どのみち使い道がなかったらしい」

「へ？」

小首を傾げる俺の前で、彼女は紙の束を取り出す。

そこにあつたのは、ダンジョン冒険者用の衣装のラフ案だった。ただし、そのどれもがプリーツスカートだったり、童話に出てきそうな可愛らしいドレスだったり。いわゆる、全部女性用だった。

「な、あつ——!？」

「ふむ。皆でつきり女性だと勘違いしていたみたいで、全て衣装の案はボツになりそうだな。いや待て——もしなってくれたら、これを着てもらえればいいのでは!? そしたら、衣装案を発注した分の代金は無駄にならずに済む! おいキミ、もしも入る意志が決まったら、どれがい——」

「どれも却下だこのやろおおおおおおおおお!!」

俺の魂の絶叫が、二十二階のフロアで反響したのだった。

——その日の夜。

「はあ……」

食事の後、ソファでぐったりと寝転がっていた俺は、知らず知らずのうちにため息をついていた。それが、自分で思っていたよりも大きかったのだろう。

お皿の片されたテーブルの上に座って、ぶらぶらと両足を振っていた亜利沙が、スマホをイジリながら聞いてきた。

「どつたの、頭ハーレム天国お兄ちゃん」

「……その不名誉な渾名、そろそろやめてくんない?」

俺はジト目でツッコミを入れる。

昨日から不機嫌が治らない妹は、ずっとこんな感じだ。しかも、毎度毎度不名誉な渾名が更新されていくから、恐ろしい。

どうやら、昨夜助けにいったのが女の子二人とわかったあげく、おんぶとか抱っこかしたのがいけなかったらしい。甲斐性なしと思われているみたいだ。

つい五分前は、確か「八方美人兄貴」だったか。

「やめると言われても、まだ私はあんたを許していないのだよ、この脳みそショッキングピンク

兄上」

「もうやめて。お兄ちゃんのガラスのハートはもう粉々よ」

「だったら溶かして固めて再構築しやがれ」

「ごめんなさい俺が全面的に悪かったからそれ以上刺々しい言葉を放つのはやめて、家族からの罵倒が一番応えるッ！」

今日も危うくドレスアップされそうになって戦々恐々としていたが、そんなものの比ではない。

息吹翔、客観的に見て最強の【弓使い】。妹に「大嫌い」と言われたらたぶん十回は死ぬる。

慌てて起き上がった俺はガクブル震えながら、ソファの柔らかい布地に頭を擦りつけて土下座する。

それを流し見していた亜利沙は少しの間無言になったが、一体そこにどんな意味が含まれるのか。

「家族、ね……」

「？」

どこか憂いを滲ませる表情のため息をついたあと、亜利沙は小さく息を吐いて俺を見た。

さつきまでの憂いを吐き出したような、いつもの愛らしい表情で。

「いーよ、もう。許す。それで、なんでお兄ちゃんはまたしなびたキュウリみたいになってたわけ？」

「それが、今日ダンジョン運営委員会から呼び出されまして……プロのダンジョン冒険者になって

みないかって誘われたんだよね」

「うっそ、マジ？ 凄いいじゃん！ え、なっちゃいなよ!!」

亜利沙は興味津々といった様子で、身を乗り出してくる。

「うまくいけば、ダンチューバーに生で会えるかもよ？」

「あー、そういえばそんなこと言ってたな、支部長さんも」

えーっと、誰だっけ。寺島支部長が出した名前は。確か――

「南あさり……とかなんとか言ってたな」

「っ！」

「……？ 亜利沙？ どした」

俺は急に押し黙った亜利沙を見て、首を傾げる。

「いや、意外だなんて思っただけ。ダンチューバーとか興味ないって言ってたお兄ちゃんから、その名前が出るなんて」

「あー、俺も今日初めて知ったぞ？ 支部長さんが『今人気のダンチューバーだ』って太鼓判を押してた。てか、むしろ亜利沙が知ってることに驚きを隠せないんだが。だって、ダンジョン冒険者じゃないだろ」

「冒険者じゃなくても、知ってるもんは知ってるんだよ。読書好きな人が、全員小説書いてるわけじゃないでしょ？ それと一緒」

まあ、言われてみればそういうものか。

しかし、ダンジョンとはまるで縁のないはずの妹も知っているとすることは、相当有名なんだろうか、その南あさりさんとやらは。

「まあ、お兄ちゃんがなんでそんな、プロの冒険者になることを渋ってるのかはわからないけどさ。私は、お兄ちゃんがプロになるかならないかより、誘われたことそのものが嬉しいかな」

「？　なんで」

「だってさ、それってお兄ちゃんのことをみんなが認めてくれたことでしょ？　お兄ちゃんを独り占めしたい私からすればよっとだけ妬げちゃうけど、同じくらい誇らしく思う。最終的にどうするかはお兄ちゃんが悩んで決めればいいけど、私は見てみたいな。お兄ちゃんが、みんなの期待を背負って格好良く活躍するところ」

亜利沙は、にこやかに笑ってそう言った。

その言葉に、胸がじーんと熱くなるのを感じる。

いつもそうだ。彼女はいつだって、俺の背中を押してくれる。本当に、心から素敵な妹をもったと思う。

だから、こういう選択をしたとしても、この妹に恥じない兄でありたいと思うのだ。

「亜利沙……」

「ま、その方がハーレム帝王☆息吹翔様（爆笑）らしくてお似合いだし」

「この胸の暖かさを返せコラ」

そんなこんなで、俺はプロのダンジョン冒険者になるか否か、悩み続けることになった。

亜利沙の期待には応えたい。しかし、素性を明かすことになれば、夢にまで見た普通の学生生活は送れなくなる。

クラスメイトとの距離感は大きく変わるだろうし、やつかみや嫉妬をぶつけてくる輩も出てくるかもしれない。

そのリスクを負ってでも、プロになるべきなんだろうか？

俺としては、その一歩がどうしても踏み出せないでいた。

しかし——思い悩む俺は気付いていなかった。

根本的な問題として、俺は一つミスをおかしていたことを。

そう。よくよく過去を遡れば、俺は乃花や真美さんを助ける気持ちが行き先するあまり、バズりまくった【弓使い】の姿で、学園内ダンジョンへ踏み込んだのではなかったか？

だとしたら、俺の知らないところで何が起きているかも、予想して然るべきだったのである。

俺の知らないところ。具体的には、学園のホームページ脇にある生徒用掲示板。そこは、休日だというのにまるで大人気ダンチューバーの生配信チャット欄のごとく、盛り上がっていた。

8 名無しの生徒さん

それってつまり……？

9 匿名掲示板だったら何を呟いても犯罪にならないからとりあえず肉まん食べたいさん

ひょっとしたら……？

10 名無しの冒険者さん

あの美少女【弓使い】、ウチの学校の生徒なんじゃね??

11 名無しの生徒さん

いやいやいや、まさか

12 名無しの生徒さん

>>9 てか、誰も名前に突っ込まねーのかよw

13 名無しの生徒さん

草

14 名無しの冒険者さん

それな

15 名無しの生徒さん

でも偶然にしてはできすぎてるって思わね？

16 名無しの生徒さん

確かに

## 【アマリス上等学園生徒用掲示板】

1 名無しの生徒さん

おい、知ってるか。三年の山田。例の激強アーチャーに助けられたってよ！

2 名無しの生徒さん

は、嘘だろ!? どこで!?

3 名無しの生徒さん

昨日誤作動が起きた学校のダンジョンに決まってるだろ！

4 ナナフシの生徒さん

え、マジ？

5 名無しの生徒さん

ガセじゃなくて？

6 ○○ちゃんに告白十連敗中さん

てか、なんでウチの学校にあの人がいんの？ 普通部外者は入れなくね？

7 名無しの生徒さん

な？ 不思議だろ？ 山田の話じゃ、ウチの学校の制服は着ていなかったらしいんだが。それでもウチのダンジョンに潜り込んでいたのは偶然とは思えねー

第一章

# 束の間のバカンス



Weakest Job  
Archer

17 名無しの生徒さん

ちょっと俺調べてみるわ！ 白髪<sup>はくはつ</sup>でショートカットの女子だろ？

18 名無しの生徒さん

確か、一年にそんな子いなかったっけ？

19 名無しの生徒さん

なにせよ、これは大ニュースすぎるだろ！

翌々日の月曜日。

いつものように学園へ行った俺——息吹翔は、正門を潜<sup>く</sup>って教室へ向かう。が、その途中で何やら妙な噂があちこちから聞こえてくることに気付いた。

「なあ、聞いたか。あの噂！」

「聞いた聞いた！ あれマジの話なの？」

「さあな。だが、この件に関してウチの教師陣はノーコメントを貰<sup>い</sup>てるらしいぜ？」

「ノーコメント？ 完全な否定じゃなくて？」

「ああ。臭いだろ？ 十分にあり得るぜ。あの人が、ここの生徒だつて説！」

何やら興奮したように話し合っているカップルらしき二人を横目に、俺は首を傾<sup>か</sup>げる。

——と。

「お——はようっ！」

ドンツと、後ろから何かに追突され、俺は思いっきり前につんのめった。

あつぶな！ もう少して顔面から地面に飛び込みをすところだった。

こんなことをしてくるヤツは、アイツしかいない。

「なんだよ、英次<sup>えいじ</sup>」

俺は後ろを振り返りつつ、ジト目で相手を——先日友達になつたばかりの八代英次<sup>やしろ</sup>を睨みつける。

黒髪のツンツン頭で、毛先だけを赤に染めているガタイのいい少年だ。こう見えてスポーツをしているとかではなく、あくまで男の身だしなみの一つとして筋トレをしているくらいらしい。

「なにして、朝の挨拶だ」

「前方不注意の追突事故じゃなくて？」

「うんにゃ。前方確認済みの突進事故だ」

「あーそうかい、また法廷<sup>ほうてい</sup>で会おう」

「悪かつたつて。この通りだ」

両手を合わせて謝ってくる英次。調子の良さは相変わらずだ。

「それより翔。聞いたか？ 例の噂」

「噂？ 何それ」

「バカお前、噂つつつたら、アレに決まってるだろ！ あの話題沸騰中の【弓使<sup>アキチ</sup>い】が、うちの学

園の生徒らしいって話だよ！」

「うげほっ、ごほっ！」

「あ？ どうしたんだよ。急に咳<sup>せ</sup>き込んで」

「な、なんでもない……」

俺はなるべく平静を保ちながらも、内心ではメチャメチャ焦<sup>あせ</sup>っていた。

は!? うつつつそだろ!?

いやよくよく考えれば、噂にならない方がおかしいな。あのとき私服に着替えてたとはいえ、部外者が平然と学園内のダンジョンにいたのは怪しい。例の【弓使い】とこの学園に、何かしらの繋がりがあると考えられても不思議じゃない！

慌てて周りの喧噪に耳を傾けてみると、英次の言う通りあの【弓使い】がウチの生徒なんじゃないかという疑惑まであがっているようだった。

とすると——早晚、俺の正体に気付く人が出てくるかもしれない。それどころか既に、俺の正体がバレていても不思議ではない……？

「おいそのお前！ お前……今話題になってる【弓使い】だろ!?」

「っ！」

不意にそんな大声が聞こえて、俺は肩をすくめる。

やばい！ 正体がバレた!? 思わず身を固め、縮こまる俺。

「お前だよお前、その白髪の——」

「あ？ 何よ」

——が、その声は、どういうわけか俺に向けられたものではなかった。

俺は恐る恐る顔を上げ、周りを見まわす。

昇降口まで伸びるポプラ並木の一本道。その一角に、数人の集団があった。

いや、よく見れば一人の少女を数人の男女が囲んでいる。

取り囲んでいる者たちの一人——一際大柄で、髪をトサカのように立てて赤く染めているヤツが、口を開いた。

「隠したって意味ねえんだよ。お前だろ、【弓使い】ってのは」

「は？ 【弓使い】？ なにそれ、あたしそんなの知らないけど」

絡まれている女子生徒は、心底迷惑そうに眉根をよせて吐き捨てる。

見覚えのない少女だった。肩くらいまである純白の髪。薄氷が張ったような薄青の瞳。透明感のある白い肌にはシミ一つなく、鋭い眼光と合わせてどこか冷たさすら感じさせる伶俐な美貌の持ち主。

それだけに背負ったバッグについている、白いネコかキツネか……よくわからないキャラクターのキーホルダーが少し浮いて見えるが。

「あれは……塩江かや？」

「え？」

顎に手を当ててつぶやく英次に、反射的に聞き返す。

「知ってるの？」

「ああ。隣のAクラスの奴だな。誰かと話しているところ見たことねえし、一匹狼って感じで近寄りがないが」

「？ やけに詳しいね」

「ふっ、当然だろ」

英次は憎たらしいほどにキメ顔で答えた。

「……うちの学園の可愛子ちゃんは、一人残らず顔と名前が一致している（キリッ）」

「うわあ……」

「ちよっ！ 引かないで！ お願い!!」

涙目になって縋ってくる英次に、俺はため息をつく。

それはともかく、だ。こんなくだらないやり取りをしている間にも、「触即発の状況は継続していた。

塩江さんに相対している大柄の生徒は、怪訝そうな表情をする彼女の方へ一歩近寄って乱暴に吐き捨てた。

「はっ、とぼけたって無駄だぜ？ 例の【弓使い】がこの学園の生徒だってこたあ、わかってんだ！ そのくらい、お前だって知ってんだろ？」

「え？ まあ、聞いてはいるけど、あたしはそんなの興味ないし……そこどいてくれない？」

「っ！ このクソアマが……しらばっくれやがって」

額に青筋を浮かべながら、男が近づく。そのまま、塩江さんの細腕を掴もうとして――

「待ちなさい、勇太さん」

不意に、体にまとわりつくような声が出て、勇太と呼ばれた男の動きがピタリと止まる。

声を発したのは、線の細い男だった。

燃え尽きた灰のようなほの暗いくせ毛に、薄緑色の瞳。パツと見はどう見たって勇太の方が威圧感があるはずなのに、こうして並んでいると無視できない不気味な圧力を放っている。

勇太を猛獣とするならば、その少年は物陰で獲物を狙う大蛇とでも呼ぶべきか。

「す、すみません……隼人さん」

あれほどまでに荒れていた勇太が、一瞬で身を引く。

「隼人？ そうか、アイツが……君塚隼人か」

「え？」

納得の表情でつぶやいた英次の方を見る。

「知らないか？ 君塚隼人……隣のAクラスのヤツだよ。数々の人や物を従え、ダンジョン運営委員会のトップの一人に上り詰めた、君塚弥虎の息子って話だぜ？」

「そんな大物が、まだこの学園に……」

先日木山豪気とひと悶着あったばかり（ちなみに豪気は病院に運ばれたのち、まだ意識は戻っていないらしい。アイツにいい印象はないが、心配だ）だというのに、今度はダンジョン運営委員会の重鎮の息子か。

つくづく、怖ろしい学園だ。

君塚は一步前へ出ると、塩江さんににこりと微笑みかける。

「初めまして、塩江さん。早速で悪いのですが……私のコレクションになってはいただけませんか  
しょうか」

「……なに言ってるの？」

「言葉通りの意味ですよ。あなたには、その類まれな強さを、私のためだけに使ってほしい」

「……はあ？」

警戒を瞳に宿していた塩江さんは、そのセリフに虚を衝かれたのか目を見開く。

「いえね。あなたが【弓使い】であることは、なんとなく予想ができています。であれば、あなたの強さに惹かれない理由などないでしょう？」

「は？ だから、さっきから言ってるでしょ？ あたしは別にあのバズってるヤツとは関係ない。

一体何を証拠に——」

「知れたことを。白髪で華奢な女性、この学園にあなた一人しかいないんですよ。だから、隠しても無駄です」

淡々と述べる君塚。

それを遠巻きに見ていた俺は、どういう反応をしていいかもの凄く困っていた。

確かに、噂では俺は少女ということになっていた。俺以外の人物が標的にされてしまう事態は、予想してしかるべきだったのだ。

特に塩江さんの場合、俺と背格好がそっくりだ。

それは決して、彼女の胸がまな板とか、俺の身長が男子の中では低い方と言っているわけではない。  
「だから隠してるわけじゃないって……痛っ！」

不意に、塩江さんの顔が苦痛に歪む。

見れば、一度下がった勇太が、塩江さんの腕を掴んで拘束していた。

「おいおい。いい加減認めて楽になった方がいいぜ？ 隼人さんは寛大だが、逆らわれるのを最も嫌う。お前が大人しく隼人さんのモノになれば、悪いようにはされねえんだよ」

「そうそう。それに、次期王の座に……ダンジョン運営委員会の実質的なトップの座につくことが約束されている隼人さんに気に入られるなんて、滅多にないんだよ。私たちが、嫉妬でどうにかなつちまうよ」

丸い派手なイヤリングを着けた茶髪の女子生徒が、勇太に追従するように吐き捨てる。

俺は、気づけば拳を握りしめていた。

一瞬でも、【弓使い】だとバレてなくてよかった、などと思っただけ自分を殴りたい。

ただ勘違いをされているだけならばともかく、俺のせいで受ける必要のない苦難に晒されているのだ。これを放っておくなどと言えるものか。

「おい、お前ら——」

「おいテメェら、その子放せよ！」

が、俺が一步踏み出すより先に英次が動いていた。

「あ？ んだよ」

行動を止められた勇太は、不機嫌そうに鼻を鳴らして、塩江さんを掴んでいた手を放した。

「そういうことして、恥ずかしくないのかよ」

「はっ、テメエこそ、そんな鉄板のヒーロームーブして恥ずかしくねえのかよ？ お呼びじゃねえんだよ」

「まあな。だが、俺は普通のヒーローとはすこーし違う」

「あん？」

怪訝そうに顔をしかめる勇太へ、英次は容赦なく爆弾を放り投げた。

「なぜなら俺は今の君達の行動を一部始終スマホで録画していたからだ！ そして、今すぐにも学園のホームページと俺のツイッターに載せて拡散できる！ なーはっはっはっはっはっ！！」

「なっ、テメエ卑怯だぞ！」

「卑怯？ それはどの口が言ってるのかにゃ？ 一度動画が拡散されたら、世間はお前らの悪行を無断で載せた俺よりも、か弱い女の子を寄つてたかつて苛めた卑怯者を非難するだろうぜ？ そう！ つい先日社会的に干された木山豪気のようになあ！ 今のご時世、デジタルタワーは怖いぞ？ さーて、どうする？ このままお前らが悪行を続けるつてんなら、俺の正義の刃が断罪を下すだろう！ さて、賢いお前らはどうするね？」

「くっ！！」

勇太は、焦つたようにちらりと君塚の方を確認する。君塚はしばらく英次の方を、目を細めて見ていたが。

「はあ……いいでしょう。ここは私たちが引くとします」

肩をすくめ、あつさりと撤退を申し出る。正直、拍子抜けだった。

権力者の息子というのは、往々にしてそれなりにプライドの高いものだ（偏見）。もちろんすべてがそうというわけではないが、あくまで彼に関しては、実際に多くの生徒を自身の手駒としてい

るらしい。

やられたらやられっぱなし、というのはどうにも腑に落ちない。

「なんだ。案外あつさり引いてくれんだな？」  
「ええ。直接ここで手を下すなんて、スマートではないでしょう？ ただ、覚えておくといいでしよう」

わずかに笑みを深めた君塚は、英次と——それから俺の方にしっかりと視線を定め、意味深につぶやく。

「私の邪魔をして、後悔しなかった者はいない」

「……」

「それでは、またの機会に」

視線で勇太に解放を促すと、勇太は舌打ちしつつ塩江さんから離れる。それから、君塚を先頭にして踵を返して去っていった。

「へっ、おとといきやがれ」

英次は鼻で笑いつつ、いつのまにか撮影していた動画を削除する。

「お前……思いつきり喧嘩売ったな」

片手でケータイを弄ぶ英次に、俺は半ば呆れつつツツコミを入れる。権力者の息子に堂々と正面から喧嘩を売るとか、怖いものとかないのかな？

「へっ、まあな。だが……どのみち俺が行かなくても、お前が同じことしてたろ？」

「あれ？ バレてた？」

「当たり前だ。何年親友やってると思ってる」

ニヒルな笑みを浮かべる英次。

その単位で言うなら大体二十五分の一年だが。

「つといけね、大丈夫だったか確認しねえと」

英次は思い出したように、その場で腕を押さえてうずくまっている塩江さんに近付く。

「大丈夫か？ ケガとかしてねえか」

そう声をかける英次だった。

「……何？ ひよっとして、助けたつもり？ 言っとくけど、あんたなんかこなくても、あたし一

人でなんとかなったから」

ツンとすました顔で、お礼を言うどころか、英次を睨みあげる塩江さん。

「い、いくらなんでも、そんな言い方は——」

思わず突っ込みかけた俺を片手で制し、英次は言葉が続けた。

——むしろ、自分から嫌われにくいような姿勢で。

「ほうほう、これが古き良きツンデレですか。ひよっとして照れ隠し？ 俺に惚れちゃっ——」

パン！ と乾いた音が響く。

塩江さんが、容赦なく右の平手を振り抜いていたのだ。

「バカ、死ぬ！」

そう言い捨てて、彼女は足早に去っていく。

俺は、頬を赤く腫らした英次をジト目で睨んで、ぼそりと告げた。

「今のはお前が悪い」

「ですよ。いやく、ツンデレだと思っただけだなあ」

ヘラヘラと笑いながら、英次はそんなことをぼやいていた。

呆れつつも、俺は彼に少しだけ同情したのだった。

英次を一言で突き放した相手、塩江かやさん。

あの性格なら、友達ができないのも納得だ。本人が気にしていないのなら、別にいいのかもしれない。

ないが。

「けど……」

俺は、塩江さんが去っていった方を見る。

これは、俺の気のせいかもしれない。けど、誰にも心を開かない彼女の背中が、どこか物寂しく見えた。

何より。

なんの関係もないはずの塩江さんが、有名になってしまった俺の身代わりになっているような、この現状も気がかりだ。

そして、案の定。

彼女を巻き込んだ大事件が、幕を開けることとなる。



その日の夜。

「じゃじゃ〜ん！ 今日のご飯は愛情たっぷりクリームシチューですよ〜」

食卓についた俺の前に、ドロツとした濃厚なシチューが入ったお椀わんが置かれる。

「ありがとう、亜利沙」

「えへへ。くるしゅうない」

お礼を言うと、クリームシチューをよそってくれた亜利沙が幸せそうにはにかむ。当然のことながら、クリームシチューは亜利沙お手製。

叔母さんが常に忙しくて夕飯時に間に合わないことが多いことから始めた料理だが、その上達ぶりはまさしく青天井あおてんじょうと言っている。オムライスやシチュー、ハンバーグといった定番だけでなく、最近ではビーフストロガノフとかクーリビヤックとか、とんでもなく凝った料理まで出してくるからすごい。

ちなみに、最近火の入れ方による味や食感の違いに拘こだわっているらしく「スチームコンベクションオーブンが欲しい」とかつぶやいていた。……いやスチームコンベクションオーブンってなに？

「さあどうぞ、お兄ちゃん召し上げれ」

「ああ、いただきます」

自分の分のシチューをよそい対面に座った亜利沙に促され、俺は白濁はくたくしたスープにスプーンを入れる。クリームの薄黄色にプロッコリーの緑、ハートや星形にくり抜いたニンジンのオレンジがよく映える。

スプーンを口に運んだ瞬間、衝撃が舌の上で弾けた。ねっとり舌に絡みつくミルクのコクと、味噌みその一つ一つを刺激する黒コショウのパンチ。噛かみしめるたびに野菜と鶏肉が互いに主張を強め、暴力的なまでの旨味が口内を駆け巡る。



「どう？ お兄ちゃん」

亜利沙の自信ありげな声に、意識が引き戻される。本当に美味しいものを食べると言葉すら出なくなるというが、なるほどこういうことか。

「ああ、めっちゃ美味い……また腕上げたんじゃないか？」

「でしょ。亜利沙ちゃんは日々進化中だからね」

どや顔で鼻息を荒くする亜利沙。

しかしどこまで進化するのやら。もう料理店できるぞ、これ。

ちなみに俺の方かというと、料理はからつきしである。その方面の才能は全部妹に奪われたようだ（血はつながってないけど）。

「今回は隠し味にパルミジャーノチーズと白味噌を加えてみたんだ。白味噌は本来ビーフシチューの隠し味の定番なんだけど、それをクリームシチュー用にアレンジして、麴の種類から丸つと変えてみたんだよ」

「へー……って、麴？ まさか、白味噌の段階から手作り？」

「もちろん！」

サムズアップしてウインクを決めて見せる亜利沙（ちなみに相変わらず両目瞑ってる）。

……そっか。手作りしちゃったのか。

もちろん、本人が料理好きというのもあるのだろうが、俺のためと言われると嬉しい反面ちよっ

と申し訳ない。このクリームシチューだろうが黒焦げのトーストだろうが、亜利沙の作ったものなら問答無用で美味しく食べてしまう自信があるぞ、俺は。

とはいえ、黒焦げトーストより何倍もの手間と時間、そして愛情を込めたクリームシチューの威力は凄まじく、あれよあれよという間に完食してしまった。いや、もはや完飲と言った方が正しいかもしれない。カレー……ならぬクリームシチューは飲み物という理論は、正しかった説が濃厚だ。

「ふう、ご馳走様」

「お粗末様」

満面の笑みを浮かべたまま、亜利沙が食器を下げしてくれる。

「あ、それくらい俺が——」

慌てて立ち上がろうとした俺だったが、しかし。

「いーのいーの。お兄ちゃんにはこれまでいっぱい助けてもらったから、これくらいは私がやらないうと。というか、やらせてほしい」

どこか寂しげな笑顔で提案を拒否した亜利沙に、俺は伸ばしかけていた手を下ろす。迷惑だなんて、そんなこと——

そう言おうと思いい口を開きかけたそのとき、テーブルに置いていたスマホが震える。誰かからの着信だ。

「ほら、電話鳴ってるよ」

「あ、ああ」

勝ち逃げしていく妹を尻目に、俺はスマホを手取る。そして、送信者の名前を見て——思わず息をのんだ。

送信者の欄には、つい先日連絡先を交換したばかりの人物——高嶺たかみね乃花の名があった。幼馴染とはいえ、いきなりの女子からの電話に体がこわばる。

恐る恐るスマホの通話ボタンをタップして、耳に当てた。

「も、もしもし……」

『あ、あの……か、かつくんですか？』

緊張してどもってしまったが、どうやら相手も俺以上にガチガチだったらしい。逆に肩の力が抜けていくのを感じた。

「そうだけど、どうしたの？」

『急にごめんね。あ、あのさ……もし、今度の日曜日、時間があたらなただけど』

「……」

『……』

一瞬の間。

耳が痛いくらいの静寂が遠く離れた場所にいる乃花と俺の間に流れ、やがて意を決したような乃花の声が聞こえてきた。

『いい、一緒に“モンスター・ランド”へ行きませんか!』



——時は遡ること数刻。

「……暇だ」

ハイライトの消えた目で、病室の窓から外を眺めていた一人の少女が、おもむろにつぶやいた。少女の名は涼城真美。

紫のメッシュが入った艶やかな黒髪は、普段こそツインテールに括っているが、今は背中に流している。理由は単純。ベッドで横になるときに、左右に尖った髪は邪魔なだけだからだ。

——先日の学園内ダンジョンの異変。

生還の指輪の機能喪失に、モンスターのランク上昇、転送陣の機能不全など様々な異変が突発的に起こり、真美はその事件の渦中にいた。

今こうして病院のベッドに横たわり、包帯やらガーゼやらでぐるぐる巻きになって「フルアーマー真美ちゃん」になりながらも、風を感じていられるのは奇跡に等しい。

が——暇なものは暇である。

「っていうか、全治二か月ってマジ？ 私その間にすればいいの。素数でも数える？」

「ごめんね、真美ちゃん。私を庇ったせいで……」

不意に、申し訳なさそうにトーンを落とした声が聞こえてきて、真美はそちらを見る。

陽光を受け、真夏のひまわりのように輝く金色の髪。雪も欺く白い肌。海よりも深い慈愛に満ちた青色の瞳は儂げに揺れ、整った顔を暗くしている様すら美しく映える。

女子である真美すら、気を抜いたら「結婚してください」と言いかねなくらいに魅力的なその少女の名は、高嶺乃花。

先の学園内ダンジョンの件で、ともに異変に巻き込まれ、乗り越えた親友だ。

「もー乃花、それ言っつのはし」

「で、でも」

しゅんとする親友の姿を前に、真美は小さくため息をつく。

この親友は、いかにせん自己評価がものすごく低い。というか、優しすぎる。

「いい？ 乃花。確かに私はあんたを庇ったけど、あんただって私を庇ってくれたじゃん。だから  
おあいこ」

「……うん、ありがとう」

乃花は、少し肩の荷が下りたように曖昧に笑う。

「それに、悪いのは乃花じゃなくて、あのよくわからん強化版“エンペラー・ゴレム”。なんなのアイツ、一応こっちは【盾使い】だったのに、一撃で防御貫通してくるとか、こっちの存在意義

なくなんじゃん!」

本来のランクから外れた脅威を見た「エンペラー・ゴレム」。あれはもう、反則の域にいた。そこから生き残れたのは、ともに事件に巻き込まれ、しかし恐怖と過去を乗り越えて敵に立ち向かった乃花と、そして何より、あの反則的なまでに強い【弐使い】<sup>アーチャー</sup>がいたからに他ならない。

(……あの、【弐使い】、ね)

そこまで考えて、真美はふと思いつく。

絶体絶命のピンチに駆けつけた、一人のヒーロー。息吹翔。今バズりにバズっているあの有名人が、乃花の思い人だと知った時には、本当に驚いてしまった。乃花に悪い虫を近づける気はないが、話してみた感じ悪い人ではない。ギリギリ及第点だ。

もっかい乃花を泣かせたら、鼻っ面をぶん殴ってやるつもりだが。

——まあ、それはともかくだ。

「話変わるけど、乃花さ」

「なに? 真美ちゃん」

「アイツにいつ告白する気なの?」

「っ、けほっ、こほっ! な、なな、なにを言って……!」

とたん、急に咳き込んで耳まで真っ赤になる乃花。なにこの可愛い生き物。お持ち帰りして  
うさ?

「わ、私は別にかっくんのこと、そ、そういう目で見てるわけじゃ……っていつか、かっくんだった、迷惑だろうし!」

「あれれ、私は別に『かっくん』とは一言も言ってないんだけどなあ」

「~~~~ッ! だ、騙した! もう真美ちゃんなんて嫌い!!」

語るに落ちた乃花は、もう茹<sup>ゆ</sup>たくみたく真つ赤になって喚<sup>わ</sup>く。咄<sup>はな</sup>嗟<sup>さ</sup>に出てきた悪口の切れ味がなさ過ぎてまったくダメージを与えられていないのに、気付いてすらいない。

乃花が翔のことを異性として好きなのは、火を見るよりも明らか。ただ問題なのは、親友が翔のことを好いていながら、なにも行動に移せていない点だ。

「冗談はこんくらいにして、乃花。わかりやすくアタックしてかないと、たぶん靡<sup>な</sup>かないよ?」  
アイツ鈍感そうだし、という言葉は口の中に留めておく。

「ぐ、具体的にって言われても……何をすればいいか」

顔を暗くする乃花。

翔と出会ってから自分を磨いてきたくせに、いざ再会したらただで途端に消極的になるとは、本当に難儀なものだ。

だが、この程度のこと、乃花の親友である真美が想定していかないはずもない。

「ぶっぶっぶ、そう言うと思って、既に準備しているのだよ」

真美は存在しない髭<sup>ひげ</sup>を撫<sup>な</sup>でる素振りしながら、ベッドの横に置いてあったポーチの中をあさる。

息吹翔が例の有名人だと判明する前から——それこそ、乃花がショックを受けてくすぶっていた頃から、ひそかに進めていたプランがある。

それは——

「じゃじゃらん！ 『モンスター・ランド』のチケットオー！」

ポーチから取り出したのは、二枚のチケット。もちろん、未来から来た青タヌキっぽい声を出すのも忘れない。

「ぞ、それ……ッ！」

「ふふ、驚いた？」

目を丸くする親友に、真美はニヤリと笑いかける。

『モンスター・ランド』。一階層しかない小型のダンジョンを全面改装し作り上げた、一種のテーマパークだ。この手のテーマパークだと、水中で生息するモンスターを飼育する水族館と、プールなどのレジャー施設が一体となった『ダンジョン・ウォーターパーク』が有名だが、『モンスター・ランド』もかなりの人気を誇る施設である。

簡単に言えば、『**獣使い**』がタイムしたり、人間になつくように馴れたモンスターと触れ合える遊園地だ。

当然、ダンジョン冒険全盛の今、なかなかチケットがとれないことで有名なのだが——

「いやあ、実はさ。私のパパが『モンスター・ランド』の経営者と知り合いでさ。それで、よくチ

ケットが送られてくるんだよね。いやあ、持つべきものはコネですな」

ひらひらと手にしたチケットを揺らしながら、真美は語る。

「それで、今なら特別に百パーセントオフでチケットをお譲りできるんだが、どうするねお客さん？ 二人でデートとしゃれ込む気はないかい？」

「にやっ！ で、でで、デート??」

「そうそうデート。想像してご覧？ ワイバーンの背の上。見下ろすは雄大なダンジョンの光景。二人っきりの世界で、互いの吐息を感じながら、**熱く抱擁**——」

「ふしゅ〜」

「あ、あれ？ 乃花？ ひよっとして、虐めすぎた……？ おーい、戻ってこーい！」

「ごめんごめん。ちょっと刺激が強すぎたね」

「もう！ 真美ちゃん、もうー！」

なんとか意識が現世に戻ってきた乃花が、羞恥と怒りで顔を赤くしながら抗議する。

「まあ、二人きりってのは少しハードルが高いだろうからさ、他の人も誘うってのはどう？」

妥協案として、真美はチケットを二枚追加で取り出す。親友の恋の**成就**のためなら、たとえそこそこの値の張るチケットだろうが厭わない。偉大な親の力を思い知れ。

「これを使って、他のモブAとBを巻き込みつつ、かっくんと仲良くなっちゃおう大作戦を敢行す

るのだ！ ちな、これ命令」

「え？ 命令!？」

「だってあなた、このままだとどうせなんもしないでしょ」

「ぞ、それは……」

「凶星だったのだろう。乃花はバツが悪そうに目をそらす。

「今週末には乃花も退院でしょ？ だったら日曜あたりに行きませんか？ って勢いで誘っちゃいなよ、今すぐ」

「い、いい、今すぐ!？」

「あまりの急展開に、乃花が目をぐるぐると回す。

「でも今すぐなんて迷惑じゃ……」

「ちなみに乃花？ これはなんでしよう」

「ちなみに乃花？ これはなんでしよう」

「なおも洩る乃花に対し、真美は真顔でもう一つの切り札をきる。手に持って見せたのは、空色の

カバーがついたスマホ。

「……ってそれ私のスマホ!? な、なんで真美ちゃんが持って——」

「さっきトイレに行ってる隙にベッドから降りてパクっといた。ちなみに折れてる足に負担かけた

から、たぶん退院も遠のいた」

「な、なにやってるの!？」

「さあどうする。あなたからかけないと、私がかっくんに鬼電おにでんして『乃花があ、かっくんと遊びたいiiiiiiii(媚び声)って大暴れしてるからなんとかして!』って言っちゃおうよ?」

「お、お願いだからやめてええええええ!」

「哀れな少女の悲鳴が響き渡り——かくして、乃花から誘う流れになったのだった。」



「『モンスター・ランド?』」

『は、はい。その、友達からチケットもらったので』

電話越しのくぐもった乃花の声を聞きながら、俺——息吹翔はあまりの衝撃に呆ぼろけてしまう。

「おそらく、幼馴染として誘ってくれているんだろうが、相手は女の子だ。遊園地に誘われてどぎまぎしない男子がいるわけがない。」

「いや待て、ひよっとしたらこれはデートの可能性も一パーセントくらい——」

『も、もちろん、他の人も誘おうかな〜とは思ってるんだけど』

「……」

『……えーと、かっくん?』

「え？ あ、いや、うん。他の人、ね。いいんじゃない?」